

<実践哲学としての「コミュニティ・デザイン論研究」を目指して>

1st フレーム「Why? 制度」ワーキング

B. 話題提供 (異世代・異分野の視点から)

話題提供者:

大和田 順子 (同志社大学大学院
総合政策科学研究科教授)



「有機農業&生物多様性を活かした持続可能な地域づくり
～風の人としての農山村コミュニティとの関わり～」

はじめに

本日は、自分が関わってきた関連の地域づくりの話をさせていただきます。改めてどんな活動をしてきたのかということ振り返った上で、特に世界農業遺産に認定されている宮崎県の椎葉村という山村と、東北の宮城県大崎市についてご紹介します。

大崎市とは10年以上市役所と仕事をしてきたので、行政を支援するという立場でかかわっています。一方、椎葉村の方は焼き畑というテーマがあり、「焼畑蕎麦苦楽部」という住民団体に5年間伴走してきました。その二つの事例を特にご紹介いたします。

問題意識としては、コミュニティ・デザイン論研究の中でも、さまざまなテーマ・コミュニティや地域(都市・山村・農村)コミュニティがありますが、テーマとしては都市農村交流あるいは農山村という普段は都市に住む私たちの見えないところのコミュニティとどう関わっていけばいいのかということ。また、近年は都市部においてもグリーン・コモンズやネイチャー・ポジティブも注目されるテーマになってきています。例えばこの近くであれば、積水ハウスの本社に里山がありますし、今後この辺りが緑の回廊として開発されると聞いています。

関東の会社ですが、私は以前東急グループで勤務していたことがあるのですが、30数年ぶりに東急電鉄の方たちと意見交換をする機会がありました。今年3月のことですが、新型コロナウイルス感染症で、お客さんが25%減っているということです。これがいつまでどう続くか分かりませんが、今までは郊外の住宅地から渋谷など都心に人を運ぶだけでしたが、今後は、沿線にある核となるような駅の周辺で職住近接、地域経済や緑、農業まで取り込むような地域開発をしていく考えで、そのような核づくりや新・里山的な事業にも今年から着手されているそうです。

そのようなことで、私に関心を寄せているのが、生物多様性や生きものと共生する暮らしです。日本の現状は、森林が7割弱あって、田畑含め9割ぐらいのところを1割以下の人が担っています。都市に住んでいる9割の人たちはその9割の面積のことをほとんど普段思いをはせることはありません。知らない人がほとんどだということもあるでしょうし、これもぜひ議論したい点です。

生きものと共生することや、生物多様性はいつ学ぶのでしょうか。かつては農山村で育った子どもたちは、子どもの頃から生きものと親しく遊んでいたもので、大人になってからもそれを都市でも守ろうと思うとか、あるいは田舎に帰ったら守るような暮らしをしよう

と思うなど、そのようなことがきちんと埋め込まれていました。しかし今は、ほとんどの子どもたちが都市で育っているのです、子どもの頃に生きもののいる暮らしをしていません。知らないまま育つので、大人になっても知らないのです。小学校3～5年生ぐらいで今そのようなプログラムがありますが、今の大学生を見ても多くが体験していません。

例えば滋賀県であれば「うみのこ」「やまのこ」「たんぼのこ」という小学校5年生のプログラムが、20年ぐらい前から導入され継承されています。都市部に住んでいる子どもたちの、生きものに対する関わりがどのように育まれていっているのだろうか、そのようなことにも関心があります。ですので、都市で生まれ育った私が、なぜか分かりませんが、それでも農山村に通うようになって、そこで知ったことや、これは大切なのではないかと考えていることを今日はお話したいと思います。

1. 自己紹介

20代の後半 1988年に東急総合研究所に百貨店から出向しました。消費生活アドバイザーの有志で『百貨店人のためのエコロジーハンドブック』を編集しました。社員用環境学習の参考書として約5,000部印刷され全社員に配布されました。

日本ではイギリス発祥の自然化粧品会社「THE BODY SHOP」は1990年から2020年までイオングループが運営していました。そこではコミュニケーション部の責任者を務めていましたが、今はフェアトレードと言われていますが、コミュニティトレードや化粧品の動物実験に反対するキャンペーンを、企業の中にありながら世界の仲間たちと一緒に実施していました。NPO、NGOとキャンペーンパートナーとして連携しながら、こういったキャンペーンを世界で展開していました。

40代になり、ロハス（LOHAS: Lifestyle Of Health And Sustainability）という考え方に出会いました。これは持論なのですが、ロハスというのは、人と地域と地球の健康をセットで考えるライフスタイルで、サステナビリティには、次の世代・途上国・人以外の動植物への三つの思いやりが欠かせません。

ロハスは、ヒッピーと呼ばれた人たちが自然エネルギー、有機農業、ローカル経済を大切にすることを創造しようと作ったコンセプトを表す言葉です。では国内ではそれらはどうなっているのだろうか、と問題意識を持ちということで各地を訪ね歩きました。50代になった頃のことです。そして『アグリ・コミュニティビジネス』（2011年、学芸出版社）という本を書きました。例えば関西であれば兵庫県豊岡市のコウノトリ、智頭町の「森のようちえん」などを書きました。関東では埼玉県小川町の有機農業、金子美登さんの霜里農場、宮城県大崎市では「ふゆみずたんぼ」や「鳴子の米プロジェクト」に出会いました。出版の翌月、東日本大震災が起きまして、以来東北に通うようになりました。福島県いわき市で始まった「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」にも長く関わってきました。今日はその話はいたしません。

2014年に世界農業遺産等専門家会議（農林水産省）の委員になり、申請地域の審査をする関係から各地の農山漁村に行き、400年ぐらい、江戸時代が多いのですけれども、細かく歴史なども知るようになり、農村というものを多面的に捉えるということを知り深く関心を寄せるようになりました。

この間、国のいろいろな事業を活用してきました。これまでにどんな地域でどんな人た

ちと何に取り組んだのか、一覧にしてみました。最初は富山県南砺市で、市が勉強会を開く形で、市民が参加しました。地域資源を活用したプロジェクトをつくりましょうというアグリ・コミュニティビジネス講座です。そこで世界遺産の合掌集落の茅ぶき屋根用の茅を取る茅場の再生をしたいという青年と出会いました。当時の私にとっては大変新鮮でした。まず「茅場って何」「茅にはどういう種類があるの」「茅って何」「どうやって茅を葺くの？」などをここで学ばせてもらいました。

様々な国の補助金を活用して地域の人たちの企画を実施していきました。当時は民主党政権下で、『緑の分権改革』調査事業」というものがありました。また、復興庁のさまざまな事業、農林水産省の今は農泊推進対策という事業になっているのですが、「都市農村共生・対流事業」、近年では総務省の「関係人口創出モデル事業」、観光庁や内閣府などを活用しました。あるときは市民の人たちと、あるときは行政の人たちと、地域の課題に対して地域の資源やこれまで取り組んできたことを活用して計画を作ります。採用されたらそれを実践するというのをやってきました。

ここから大崎市の話に入ります。この写真は、蕪栗沼から渡り鳥のマガンが朝一斉に飛び立つところです。知り合いが農林水産省から大崎市に出向して、そのときに写真付き葉書が来たのです。「一体このおびたしい数の鳥は何だろう」ということで関心を持ってしまったのが、全ての始まりでした。

これが2010年のことで、今年2月にふるさとづくり大賞で総務大臣表彰（個人表彰）を頂きました。これは大崎市が申請し、大崎市の活動で私が表彰されるというものでした。その報告書に作成された年表があります。取り組みのプロセスとしては、2010年に『アグリ・コミュニティビジネス』の取材で大崎市を訪問し、蕪栗沼の魅力および課題を知ったのがきっかけです。そのような素晴らしい取り組みが可視化されていない、もったいないではないかというのが私の当時の問題意識だったのです。

次が東日本大震災からの復興というステージです。これまで自治体とNPOと市民の人たちが一緒になって取り組んできたものを形にして、多くの市民や、市外というか都市の人たちに知らせたいと「風の人」として思ったのです。最初の表紙に「風の人として」と書きましたけれども、よく「土の人」や「風の人」と言いますけれども、分類するとやはり私は風の人なのだろうなと思って書いたのです。

私はこのプロジェクトにプロジェクトマネージャーという立場に関わったのですが、その一つの取り組みが『渡り鳥からのメッセージ』という絵本でした。この絵本は、渡り鳥が地域の人たちに、皆さんのおかげで私たちはこうやって今もここに来ることができるのです、と感謝を述べる内容です。葉祥明さんというとてもすてきな絵を描く絵本作家さんをお願いをして制作しました。今では市内の図書館に置かれています。

当時から、社会・環境・経済という三つの側面から取り組むというフレームワークで発想していました。例えば社会・文化の側面では、今の絵本や美しい映像を作りました。「生きものクラブ」は市役所が実施していた子ども向け環境学習・人材育成プログラムです。生物多様性を大切にすることを育もうという目的で実施されています。

環境の側面では、渡り鳥と共生するという取り組みや、蕪栗沼に生えているヨシをペレットにして、そのペレットを大崎市民病院で使うという取組をNPOが行っています。

また、「ふゆみずたんぼ」という、冬に水を張る冬期湛水があります。2005年に、蕪栗沼

及び周辺水田がラムサール条約に登録されました。「蕪栗沼及び周辺水田」ということで、水田がラムサール条約の名称に入ったのは世界でも初めてのことで、水田は湿地であるという新しい考え方を大崎市から世界に発信しました。その立役者は「日本雁（がん）を保護する会」という NGO の方たちが市役所に働きかけ、それが行政や環境省が受け止め、連携しながら世界に発信していったという経緯です。

「ふゆみずたんぼ」で作ったお米を一ノ蔵が日本酒にしていましたし、新たな商品開発、東京丸の内の丸ビルでのプロモーションフェア、ドイツのビオファという展示会への出展など、そのようなことを 2013 年くらいまでしていました。

翌 2014 年に大崎市は周辺の 4 町と世界農業遺産に申請したのですが、同時期に私は農林水産省の「世界農業遺産等専門家会議」委員になったことから直接関われなくなりました。同時期に、私は宮城大学大学院に在籍していましたので、世界農業遺産に関し、調査研究を継続していました。

2017 年に大崎市と周辺の 4 町は世界農業遺産に認定されました。認定後は農業遺産を活かした地域活性化策を実施するというので、GIAHS ツーリズムや大崎耕土で SDGs を学ぶプログラムを開発しました。これは観光庁の事業を使い、一般向け、企業向け、大学生向けにプログラムを開発して、コロナのときでしたので、リアルなツアーができず、全てオンラインで実施しました。オンラインツアーのノウハウ、組み立て方を、宮城おおさき観光公社という団体と大崎市と一緒に取組みました。

2. 世界農業遺産と SDGs

その世界農業遺産のことを少しお話しします。現在、世界 22 カ国 67 地域が認定されています（2022 年 8 月時点）日本では 13 地域に増え、中国が一番多く 18 地域になっています。日本は今年 7 月に滋賀県の琵琶湖がついに認定されました。山梨県峡東地区の葡萄も一緒に認定されました。コロナで現地調査が国連食糧農業機関（FAO）から来られず、2 年ほど遅れたのですが、ようやく認定されました。滋賀県は関西なのでこれから積極的に PR されていくのではなかろうかと思います。

農業遺産には五つの基準があるのですが、このうち二つ目の「農業生物多様性」という基準がとても重要です。基準の一つ目は「食料及び生計の保障」で、何を作って生計を立てているのか。二つ目が「農業生物多様性」で、その農林漁業があることによってどのような希少な動植物が保全されているのか、あるいは遺伝資源がそこにあるのか。三つ目が「地域の伝統的な知識システム」で、その農林漁業にどのような伝統的な知識システム、技術、技があるのか。あるいは水の利用はどうなっているのか。四つ目が「文化、価値観及び社会組織」で、食文化や農耕儀礼といったものです。その結果としてどのようなランドスケープ、シースケープがあるのかというのが五つ目の「ランドスケープ及びシースケープの特徴」です。この五つの基準について、申請する地域は詳細な調査を行い、改めて自分の地域に固有の農林漁業はどうなっているのか、それを一つのシステムとして表現して申請します。

世界農業遺産の成果と課題、可能性と限界としてどのようなことが挙げられているのか、各種資料から抽出しました。経済的に、これで売り上げが上がったということは他の調査でも明確には言えない状況です。6 月に和歌山県みなべ町に行く機会がありましたが、み

なべ町は農業遺産に認定された後に売り上げが上がっていると聞きました。梅農家の収入が増えているのですが、この要因は、中国から梅が入ってこなくなったので、どんな梅でも買い手が付くようになって、高く売れるようになったからだという違う要因だということでした。他には梅干しのダイエット効果、美容効果などです。みなべ町には「うめ課」という課があって、そこが国内外で昔からプロモーションを積極的にしています。総じて担い手の人数は減っています。ただ、大きな成果として、従事している人たちの誇り、地域住民のふるさとへの誇り、プライドが醸成されます。それから、地域独自の認証制度をつくってブランド化を図っている地域も複数あります。ある意味価値が可視化されて、新しい売り上げができるということではあるかもしれません。

また、地域の固有の食文化や農耕文化を継承していこうという意識が高まります。大崎市でも以前は在来作物には関心がありませんでしたが、農業遺産に申請して以来、「鬼首菜ってのがありまして」など、在来作物に目が向けられるようになりました。

一方、課題としては、13地域しか認定されておらず、国内の圧倒的多数のところは農業遺産に関係ないわけです。そこで、この考え方を、農業遺産ではない地域にどう適用できるのだろうかなど、その方法を考えているところです。

農業遺産に関する世論調査が2021年、内閣府で初めて行われました。「言葉だけは知っている」も含めて、3人に1人が知っていると回答しました。日本では2011年に最初の認定がなされ、10年経って認知は上がってきました。また、農業遺産地域の特産物も機会があれば買いたいという人を含めると75%は買いたいと回答しています。行ってみたい人も75%です。農業遺産というもの、地域固有のそこにしかない景色など、こういう背景があるということをお伝えすると、恐らく行きたい人はそれなりにいるのだろうと推察されます。

世界農業遺産の認定地域がSDGsにどのように取り組んでいるか2回（2019年、21年）調査しました。どの目標に取り組んでいるか全11地域の集計を見ますと、全ての地域で、2番「持続可能な農業」（飢餓をゼロに）と15番「陸の生態系」（陸の豊かさを守ろう）について取り組んでいると回答されています。

2年前に比べて増えている項目は、4番「質の高い教育」、11番「住み続けられるまちづくり」、12番「持続可能な生産消費」といった項目です。「質の高い教育」というのは、地元の子どもたちに学校の授業等を通じ、農業遺産について教えるというようなことです。

3. 生物多様性を活かした持続可能な田園都市 世界農業遺産 & 「SDGs 未来都市」～宮城県大崎市～

次に「SDGs 未来都市」についてお話しします。2022年5月20日に新しい自治体がSDGs未来都市に選定され、累計では2022年までに154の自治体がSDGs未来都市に選ばれました。県で認定されているのは16です。

その細かい表が内閣府のホームページに出ています。これは昨年度までの表ですが、黄色はモデル事業に選ばれたところです。

今年は30の地域が選ばれていますが、細かく提案のタイトルを見ているととても興味深いです。それぞれの地域の個性、特徴を前面に出す形でモデル事業を組んでいることが感じられます。

特に、2022年度自治体SDGsモデル事業で選ばれた10の取り組みは、例えば東京都足立

区は、貧困の連鎖を解消する都市部モデルを構築する、「逆境を『まちの力』で乗り越える足立 SDGs モデル構築事業『やりたくてもできない』から『やりたい!』に。」というものです。千葉県松戸市は、常盤平団地が高齢化でかなり衰退しているのを、それを Z 世代が起爆剤で変えていくのだという「Z 世代を起爆剤に多様な主体が奏でる常盤平団地エリアのリ・ブランディング」という事業です。

近くでは大阪府阪南市は、海の中のアマモのブルーカーボンとお茶畑のグリーンカーボンと、海・山の双方で CO₂ の吸収策を推進していくもので、「共創による新しい地域価値の創造 カーボンニュートラルの先にある Co-ベネフィット型未来都市に向けて」という事業です。

この「未来都市」というのは、誰が主体になっているかにもよりますが、行政が音頭を取り企業や市民が参加して推進するので、コミュニティ・デザインの一つの手法ではないかと捉えています。

大崎市は、これまでの 20 数年間、生きものと共生する農業に取り組んできたことをベースに、2017 年に世界農業遺産に認定されましたが、認定から 5 周年の今年 SDGs という視点から改めて世界農業遺産を捉えることによって、市民の関心喚起や参加の向上などにつなげていこうと考えました。

経済・環境・社会の 3 側面から統合的に捉えるという内閣府のフォーマットに合わせて記入します。経済面では、世界農業遺産に認定後に制定された認証制度を活用しブランド化を推進することや、GIAHS ツーリズムにより人を呼ぶことや新規就農者を増やす、平面的水田農業なのでスマート農業などにも取り組んでいくという内容です。

環境面では、生きものと共生をこれまでも行ってきましたが、これからも続けていく、また、有機農業など環境保全型農業の面積を拡大していくことです。

社会面では、市民の参加意識の向上ということで、学校では副読本を作成し、すでに学習プログラムに取り組んでいますが、企業などいろいろなセクターにも CSV や CSR として世界農業遺産への協力・参画を促していくことなどが挙げられています。

統合的な取組として二つが挙げられています。一つが大崎 GIAHS・SDGs プラットフォームの形成です。もう一つは大崎ネイチャー・ポジティブ定量化です。この二つに取り組むものとなっています。このプラットフォーム形成事業というのは、関係者が一堂に会して対話する組織を作ることなどです。職員同士がフラットに対話しながら、新しい何かを生み出そう、課題を解決していこうという機運を高めていく狙いです。市民、職員、ステークホルダーの研修やワークショップを行います。そのような形で、学習する組織、対話する組織、そういったものの実現を支援したいと考えているところです。

大崎市の人口約 12 万 6 千人のうち、1 次産業に従事している人は約 1 万人で、8%しかいません。その 8%の人たちが、森林と農地を合わせた約 75%、4 分の 3 の面積を担っているのです。しかしその景色は、住民のほとんど人たちが享受しています。これは『渡り鳥からのメッセージ』の最後のページです。「あなたがた人間と 自然に生きるわたしたちは この地球の同じ仲間です。自然と文明は 決して調和できないことはないのです。この素晴らしい あるべき姿が この蕪栗沼で わたしたち渡り鳥と あなたがた人間が協力しあいながら 今もやりつつあることなのです」というのが絵本からの引用です。

このような考え方が市民一人一人に根付いているだろうか。そう思って暮らしているの

だろうか。よそ者の私は、これはとても大事なことで、この地域の魅力だと思っています。一人でも多くの市民がこの考え方を共有、共感し、自ら発信し広げていけるようになることを願っているところです。

4. 焼き畑 世界農業遺産～宮崎県椎葉村～

宮城県の大崎耕土は平野部の非常に広い水田でしたが、次は山間地です。宮崎県高千穂郷・椎葉山という 2015 年に世界農業遺産に認定されたエリアについてです。ここの人口は、5 町村で 2 万 7000 人です。宮崎県の中でも山間地です。ここは「山間地農林業複合システム」といって、山間地に住む人たちが複合的ななりわい、林業とお茶、牛、米、シイタケなどを組み合わせて暮らしているところです。高千穂町は多くの神話が残されていて、諸塚村は林業とシイタケ、椎葉村は焼畑が有名です。

私は農業遺産に認定された後に初めてこの地域を訪問しました。焼畑という言葉は知っていましたが、そもそもそれはどんなことなのか、どんなものなのか全く知りませんでした。2016 年 8 月 3 日に初めて焼畑の火入れに参加することができました。まず山の神様にきちんとお供えをして、祝詞を上げてから山に火を入れていきます。火を入れるためには、もちろん木を切って整地をしておく必要があります

ここでは、地元の小学校が 30 年以上「子ども焼畑体験学習会」を行っています。これに参加した 30 年前の子どもたちが今、親になっています。もちろん大人も一緒に手伝うのですが、子どもたちが自分たちで山に火を入れて、ソバの種をまきます。それからソバを収穫してソバ打ちをして、それを地元の人たちにふるまうという一連の活動をしていて、これがふるさと意識の醸成につながっていると言われています。

冬になると、収穫を山の神様に感謝する神楽がオールナイトで集落内で行われます。

山の恵み、山里の暮らしということで、椎葉クニ子さんという、90 幾つのおばあさんがとても有名です。NHK の映像や本にもなっています。クニ子さんの息子さんの勝さん・ミチヨさんが民宿「焼畑」を営んでいます。

「焼畑蕎麦苦楽部」という住民グループがあります。椎葉勝さんという焼畑継承者が 10 数年前に発足させました。椎葉勝さんは 20 年間、椎葉村を離れ、島根県で家族で暮らしていた時期があるのですが、村に帰ってきて、相互扶助の精神をこの地域では「かてーり」や「かちゃーり」というのですが、そういった精神が失われつつあることを憂慮し、何とか残していかなければならないと考え、焼畑蕎麦苦楽部を作りました。

焼き畑は、昭和 30 年代頃までは全国の山間地で行われていましたが、今でも継承されている地域はごくわずかです。椎葉でずっと継承しているのはこの椎葉勝さんの家だけです。他何軒かは何年かに 1 回火入れを行うという感じです。

農業遺産に認定された後、椎葉村は焼畑の映像を作ったり、焼畑の手順書や絵本を制作、苦楽部でも雑穀の商品開発をするなど、新しいことにチャレンジしました。

さて、ここには「暗黙知」と書きましたが「在来知」とも換言できるでしょう。在来の知をいかに可視化しておくかということで、「椎葉の焼畑手順書」を作りました。実際に火入れというのはどこからどのように行うのか、どんな道具を使うのか。それから、椎葉の山もスギ、ヒノキが中心なのですが、椎葉勝さんは、スギ、ヒノキを切って広葉樹林に変えていっています。また、焼畑は循環型の農法で、米が植えられない山間地の傾斜地なの

で雑穀を栽培していました。

さらに数年前から、「森は海の恋人」に倣い、そういった考え方を椎葉さんも取り入れて、「海山交流植樹祭（山と海はともだち）」を始めています。これは、数年前に私も行った第1回の植樹祭の写真で、右側の方は京都大学の田中克先生です。「森里海連環学」を提唱された田中先生ともここで出会いました。椎葉のこの取り組みを大変評価してくださっています。標高1000m級の山あいには鯉のぼりが泳いでいます。マグロの解体ショーもしています。

交流・関係人口の増加に向けた取り組みとして、「焼畑雑穀オーナー制度」という試みも行いました。移住した女性もいるので、そのような方々と一緒に行った取り組みです。また、首都圏の働く人たちを案内し、焼畑や山の暮らしを体験してもらうツアーも実施しました。

では焼畑にはどんな生きものがいるのかということで、生きもの調査も行いました。「いっしょうひゃくしょう」という言葉があります。「一生百姓」ではなく、「一焼百生」という、椎葉勝さんの言葉です。1回焼くと翌年にはいろいろな植物が出てくるのだということです。それは本当か、どんな生きもの、どんな植物や昆虫、鳥が来るのかでは調査しましょうということで、2019年に行いました。そのときに地元の子どもにも参加してもらって一緒に調査しました。東京から調査員の方にも来ていただきました。バツがいたので地元の小学6年生の男の子に「持ってみたら」と言ったところ、「えー、生まれて初めてだ」と言うので大変驚きました。椎葉のような自然豊かな山間地に住んでいる子どもが、なぜ昆虫を小学6年生になって初めて触れるというのか、村の生物多様性学習の現状なのだと思います。春夏秋に焼畑の生きもの調査をして、「椎名の焼畑 生きものハンドブック」を制作しました。

焼き畑に私が惹かれたのは、知らないことがたくさんあり、いろいろな可能性があると感じたからです。焼畑関連は調べてみると全国でも行われていて、近年、復活している地域も複数あります。『焼畑が地域を豊かにする』という本の書評を6月に書いて、全国の地方紙に載ったところです。

このようなことをやってきたということで、以上が話題提供となります。ありがとうございました。



質疑・意見交換

—————（山口） 大和田先生のお仕事とご関心を改めてお伺いし、ソーシャル・イノベーションの実践に取り組んでこられたことがよくわかりました。実際、宮城の大崎市では地域の問題点、つまりはバツ（×）を探して問題解決するという姿勢ではなく、良いところを伸ばす、言わば丸を二重丸にする関わりだと受け止めました。一方で、宮崎の椎葉村では、×や○や△といった、地域の有り様を何らかの形で評価していくような関わりで

はなく、むしろ日常の動きに丁寧に寄り添っておられると感じました。

私もいくつかの地域に関わってきましたが、特に農村部では都市部のように人や物の動きが頻繁ではないものの、長年にわたって営まれてきた年中行事が、ある種お祭りに連続することで生活リズムがうまく整っている、という感覚を抱いています。つまり、人間の暮らしが環境をコントロールしないということを前提にした社会システムが成立してきた、ということです。近代以降、生きものとしての人が営んできた農耕が、人間の生活や生計を支える生業としての農業に変わっていきました。しかし、椎葉村での「一焼百生」といった地域の暮らしに根ざした知恵が、現代において未来に向けて大切にされてきている共生やサステナブルといった観点のもとで、自らのコミュニティをどう大事にしていくのかを見つめ直す手がかりになる、と痛感しました。都市部から見れば変化のないように受け止められる農村部では、イベントと言うと元も子もないのですが、種まきから収穫までの畑仕事や秋祭りをはじめ、非日常の連続の中で地域の営みが大事にされていると言えます。

ただし、コミュニティ・デザインについて、地域をデザインする、転じて何かを変えるというソーシャル・イノベーションの観点で接近すると、人々の暮らしに何かを仕掛けることが中心になりがちです。大和田先生のお話では、暗黙知でなく在来知と言い換えられた点を含めて、外からやってきた人が地域の問題を探して、先ほどの言い方ではバツだと指摘して、これをやるべきだと価値の押し付けをしない意義を改めて確認させていただきました。

そのような中で、2点お伺いさせてください。まず、今回の大きなテーマである「制度」について、長らく企業でのご経験の中で、あまり関心を向けることはなく、富山県南砺市の茅ぶきの話で触れられましたが、現場で「こういう制度がある」と教えていただいた、ともお示しいたきました。ただ、南砺だけでなく、大崎や椎葉での現場との関わりでも、多くの制度に触れ、向き合い、関わってこられたように受け止めています。何より、世界的な動きとしてロハスもまた世直しの制度としても位置づけられるでしょう。そこで、制度という言葉は一旦、横に置いた上で、大和田先生は世界農業遺産も含め、新しい概念にどう出会ってこられたのか、というのが最初のお伺いです。

言い換えれば、一つ目の問いかけは、大和田先生が新たな概念に触れ、それを広めてこられたのは、企業経験の中での嗅覚か、あるいは何か求められる中でご自身によるリサーチの成果か、どう受け止めておられますか、ということです。「制度は行政から知った」と仰るものの、大和田先生の現場は多岐にわたっておられますし、福島や宮城には復興という社会的なインパクトの中で関わられたでしょう。何より、企業でのご経験を通じて、人的なネットワークがあつての現場や概念に出会われているかもしれません。

ですので、新たな概念に現場で出会われているというのであれば、そもそも現場とどう出会われているのか、ということにも触れていただければ幸いです。ただ、例えばSDGsについて理解した上で新たな現場に出会っておられるといった展開も想定されます。そうした場合には、そもそも概念とどう出会われているのか、差し支えのない範囲でお教えてください。

整理しますと、制度は行政から教わったという中で、多彩な現場、さらには幾つかの鍵となる概念、とりわけ世界農業遺産あるいはSDGsとどう出会ってこられたのか。ロハス

はロハス会議 2002 年に向かってという話でしたが、どう概念に出会ってこられたのか。端的に言えば、それは企業のご経験の中での嗅覚のようなものによるのでしょうかというのが一つ目の問いです。

二つ目は、関連するかもしれないので問いだけ投げ掛けておくと、では現場で担い手に出会った中で、どう動かれていますか、ということです。これを一つ目の問いへのお応えの後でお伺いさせていただきます。まずは感想と質問を投げ掛けさせていただきました。

(大和田) 社会人になって最初に勤務したのは百貨店だという話をしましたが、百貨店に限らず、小売店は、次のトレンドはどこから来るのか、絶えず新しいものを探してきてはそれを提示して、さあ次、これが新しいですよと言って、ある意味、消費を喚起するところがありますよね。

百貨店に入ってから、仕事が企画系だったので、次は新しいものはどこから来るのか、他社は何をやっているのかというリサーチをすることが担当業務でした。特に西武百貨店に注目し、「アクロス」という雑誌を読み、百貨店等を歩き次のトレンドはこういうのが来るのかと、情報収集をする日々でした。次は何が来るのかといったことをいつもリサーチしているわけです。そして「これが次の新しい・・・」と言うわけです。それを企画にしたり、商品化したりするという習慣から、ロハスに出会ったのだらうと思います。THE BODY SHOP もそうなのですけれども。元々問題意識としてエコライフを広めていきたいと思っていました。どうすれば広がるのだらうという問題意識の中から、おしゃれにやった方がいいのではないかと。そのような中で、THE BODY SHOP のデザインセンス、イギリスの THE BODY SHOP ならではのポスター等のデザインがとても斬新に映りました。「このようにセンス良くやれば社会問題も伝わり、広まるのだ」ということで THE BODY SHOP に注目しました。また、同社は収益を上げるだけでなく、社会の変革を両輪に経営する企業姿勢も非常に新しいと思ったのです。そして、それを広めようとも思いました。

ロハスも、最初に聞いたときに、健康と環境をひも付けることに大きな可能性を感じました。ロハスなライフスタイルというと、ヨガをやって、オーガニックなものを食べて、当時ですからプリウスに乗って、パタゴニアを着て、アメリカなので全部ブランドにひも付いていくわけですね。「なるほど、これは日本にぴったりだ」と思って紹介しようと思った背景がありました。

その後『アグリ・コミュニティビジネス』という書籍を出版し、各地から呼ばれるようになりました。講演会に行くと「実はうちの地域はこういう悩みがあって」「僕はこういうことに関心があるので一度来てもらえませんか」などと言われて、現地に行くきっかけができます。また、東京ではいろいろなロハスビジネスのネットワークとして「ロハスビジネスアライアンス」という団体も設立・運営していましたので、そのような経営者の中に、「長野県の池田町でジャーマンカモミールをオーガニックで栽培している」という方があり、「だったら、ハーバルヘルスツーリズムなど取り組んではいかがですか」と提案したり、そのような意味では、マーケティング発想というか、事業化発想というか、何か新しい考え方やコンセプトをつくるということがずっと習慣化していたということかもしれません。それが 1 番目の、新しい考え方や新しい場所に出会ったきっかけです。

農業遺産に関しては、そのような都市農村交流にいろいろ携わり、情報発信してしまし

たが、それを農林水産省の担当者がご自身でネットで検索して見つけて、コンタクトをいただいたのがきっかけです。農業遺産という制度を紹介され民間女性枠での委員を探していると打診があり、世界農業遺産等専門家会議の委員を務めることになりました。

————— (山口) ありがとうございます。概念との出会いについて、よくわかりました。その上で、世界農業遺産の委員をされている間に大崎市には関わられなくなったのですが、大学院にて研究されたことで、改めて現場の担い手の動きに関心が向けられたことと思われそうです。そして、宮城大学のリポジトリに博士論文が収められていましたので、今回のお話でも少し触れられた「都市農村協働力と農山村の持続可能性モデル」を拝見しました。そこでは、地元、周辺地域、都市という具合にコミュニティには領域・幅があり、その担い手としては、地域住民、自治体・周辺地域住民、都市住民として位置づけられました。私の理解では、個別の既存の担い手を割と中心にされていて、担い手の人材育成にはあまり踏み込んでいない、という印象です。ただ、持続可能性は現状のベンチマークでもあり、むしろ担い手の育成という未来志向の視点も求められるのではないかと読み解きました。それが先ほど、二つ目の問いかけとして、担い手についてお伺いしたい、と言った背景です。

大和田先生は「都市農村協働力と農山村の持続可能性モデル」でロバート・パットナムによるソーシャル・キャピタルに関する議論をもとに、地元は結合型の Bonding で、周辺地域は統合型の Linking で、交流人口あるいは関係人口による橋渡し型の Bridging と位置づけられ、都市と農村の交流がもたらされる、と整理されています。もちろん、非常に分かりやすい図式ですが、もしかしたら意図的にこのモデル化の中では担い手の育成に関心を向けられていないのではないかと、という気がいたしました。とはいえ、地元に入っていくと、スーパーマン、スーパーウーマンだけでは地域は成り立たないことは肌身で感じておられるでしょう。そして、自ずと次の担い手のことが地域の方々の語りに出てくるのではないのでしょうか。

先日、2022年の3月10日から6月7日にかけて開催されていた国立民族学博物館での企画展「焼畑」にて、五木村の嶽本キクエさんのパネルを拝見しました。その際、道具とセットで身体的な知として継承されてきたものについて、その継承の難しさも含めて解説されていました。大和田先生も、例えば茅ぶきの南砺市の若者との出会いに触れられたように、ご関心の一つに未来の担い手があるのではないかと捉えています。そこで、地域の担い手づくりの問題に向き合わないのか、とシンプルな問いを投げかけさせてください。

一方で、一連のお話から、現場の実践においては多くの担い手をつなげていらっしゃると思っています。ですので、二つ目の問いは「現場ではどう新しい担い手が生まれてきていますか」と置き換えることもできるでしょう。そして、もし担い手を育てる、あるいはつくるということに関心をあまり向けられていなかったとすれば、焼き畑の手順書などいろいろなものを作られてくる中で、新たな担い手の誕生、育成にどう向き合っているのか、という問いにも発展します。さらには、そうしたご自身の現場への姿勢のもとで新たな潮流、現象が生まれていますか、という投げかけもできそうです。中途半端な問い掛けですが、私の関心が担い手づくりにある、というご理解のもと、お応えいただけますでしょうか。

(大和田) 大崎の場合は、対話する組織と先ほど言いましたが、学習する組織になってもらいたいので、人材育成を意図して研修を実施しています。

他の地域は、大体最初に担い手、キーパーソンを見つけています。その人にプロジェクトを通じていろいろなことができるようになってほしいということで、事業を通じて育成をしていると言えるかもしれません。何年かしたら私たちはいなくなるので、自立していきえるようになってねと思い取り組んできました。

福島とはプロジェクトを始めたころから 10 年来ずっと関わっています。最初の頃はプロジェクトをつくって、軌道に乗るまで一緒にあれこれやっていたのですが、そもそも彼らは力を持っているのです。もちろんいろいろなことをつなぎましたけれども。だから担い手の育成は、そんな育成できるようなものではないというのですかね。

————— (山口) 担い手の育成は「する」か「しない」の問題ではなく「できない」とのお答えでしたので、改めて「どう担い手が立ち上がっていますか」を伺わせてください。ちなみに私はプロジェクトを通じて生み出されていく、つまり役割や出番をつくっていくということかなと理解しています。そのため、担い手の育成は外部の人間が担う問題ではない、というのは私の関心とも響く答えを頂いたという感じです。

お伺いにあたって、また感想と意見を述べさせていただくと、私は担い手と仕掛け人を区別していて、大和田先生をはじめ、ここにいる皆さんは地域で仕掛け人にも多く出会われていることでしょう。仕掛け人の定義は簡単にはまとめるにくいものの、直接的な担い手ではなく、次世代のリーダーでもサブリーダーでもない、今のリーダーの小間使いさんのような人、とでも言えるのでしょうか。川中先生などがよく使われる理論の一つ、正統的周辺参加に基づけば、徒弟制と言わない徒弟制のもとでの担い手づくりを仕掛ける人とも言えそうです。

地域で何らかのムーブメントが立ち上がる中では「ああいう人、格好良い」というモデルやライバルが出てきます。私が担い手に関心を向けているのは、そうした「格好良い人」のイメージが先行して、過度にリーダーシップを求める、また地域の外から助けてくれるヒーローを期待する、といった反動に触れたことがあるためです。例えば、地域おこし協力隊の参加や貢献を安易に地域の未来を左右するような立場に位置づけてはいけないということです。

外部支援者はよく「風の人」と呼ばれます。地域に風が吹き荒れると、風と風が変にぶつかり合ってしまう。やはり地元の方々が地域で担い手を見つける、キーパーソンが見出されることの方が私にはしっくり来るんです。もちろん、外部の助っ人に絶対に頼るな、と言いたいのではなく、気づいていないだけで既に素敵なことに取り組んでいる、キラリと光る人がどの地域にもいるのではないかと、ということです。冒頭のコメントで言った、丸を二重丸にする、良いところを伸ばすという観点で大和田先生が地域を見ていらっしゃるなら、何かお答えがあるだろうと思って、投げかけさせていただきました。

(大和田) その中で言うと、埼玉県小川町の事例は当初から次世代を担う人材育成を意図して取り組んだ事例です。金子美登さんという「霜里農場」を運営する有機農業界のり

ーダーがいて、彼は全国的にもとても有名なのですが、次の世代は一体どうなるのだろうと思ったのです。2010年頃から通い始めたのですが、地域の人たちとワークショップを行いました。廃校になった小学校（下里分校）を活用したいのだという彼らの思いがあり、ワークショップでは活用するための組織や活動をつくり出すことを目的に検討いただきました。実際に当時はまだその小学校は小川町役場が管理していたのですが、その隣に霜里農場があったので、ではまず交流人口を増やそうということで、有機野菜塾という塾が企画され翌年春から開始されました。もう一つは貸し菜園事業でした。この二つの事業の受け皿として NPO 法人霜里学校が次の世代の 40 歳ぐらいの人たちによって設立されました。10年後の今も続いていて、とてもうまくいっています。

この事例は意図して、次世代の人たちが活動する場や事業をつくろうとしたものですが、それは私がやったというよりも、そのようなタイミングでたまたま私がそこにいたので、「そのようなものをやったらいわよね。というようなものです。

—————（新川） 大崎や椎葉、琵琶湖は今日はたくさんは議論しませんでした、その他いろいろな事例のお話を聞けました。本当に先ほどおっしゃったように、農村や山村といっても全部違うのですけれども、大和田先生にとっての農村や山村はご自分の中ではどのようにイメージをされているのでしょうか。あるいは 10 年ぐらい関わってこられて、そこでの農山村の見方、考え方、感じ方がもし変化したようなところがあればお伺いしたいです。

（大和田） SDGs ウエディングケーキの図は、ストックホルム大学のレジリエンス・センターが作ったもので、近年は農林水産省のパンフレット等にも記載されていて、日本ではよく知られていると思います。一番下にある自然資本ですが、それがあるのは農山漁村ですよ。これが大きくなればなるほど上も大きくなりますよね。下が小さくなれば上も小さくなりますよね。やはりここを担っているのは、皆さんの地域ですよということ。ですから、この図に出会ってからは、いつも使って SDGs を説明しています。

私は東京生まれの東京育ちで、東京以外に住んだことがないことからだと思うのですが、知れば知るほど、農山漁村は魅力ある場なのです、私にとっては。だから都市は、「まあもういいかな」という感じなのです。

ああいう焼畑の火入れ、冬に行われる夜神楽。神楽は神様に感謝する農耕儀礼で、舞を奉納するという言い方をするのですけれども、ああいう都市ではもうないものに惹かれません。

ただやはりローカル SDGs ということを考えると、それぞれの地域でそこにいる生きものをどう守ったり増やしたり、再生させたりすることができるかということを考えるのが、市民にとっては足元からの SDGs につながるのではないかと考えているところです。

ですので、やはり最初に申し上げたように、農山村は私にとって魅力がある場所なのです。知らないことがある、知らないものがある。逆に、そこにあって何で都市にはないのだろうかとか、相互扶助の精神が、では何で都市にはないのだろうかとか。昔はあったのかもしれないとか。やはり私の場合はふるさとがないので、そのような意味での「ふるさと探し」的などころもあるのかもしれません。

————— (新川) はい、ありがとうございました。農山村はもちろんいろいろな魅力がたくさんあると思います。大和田先生の今日のお話では、自然生態系のお話、なりわいの農業生産、そこで実際に生み出される食べ物の話、神楽のような文化や歴史、そこで培われる風土のようなこともありました。それぞれに魅力的なのだろうなと思っているのですが、特にその中で、ある種、「あ、こんなのあるんだ」とお思いになったところがそれぞれにあると思います。相互扶助という言い方がありますが、具体的に、こんなときにこんなふう役に立っているということを見たときに、初めて「ああ相互扶助なんだな」というのが分かると思います。

例えば茅ぶきの話で言うと、伝統的には集落を単位として茅を育てて、15～20年でふき直さなければいけないですから、順番に毎年、地域の人たちが茅を管理して、刈って、そしてみんなで屋根ふきしていたところが伝統的にはあったと思います。何かそのようなものを知ったときの魅力のようなものがあつたと思うのですが、大和田先生にとって、そのような魅力のポイントというのは何ですか。焼き畑だったら焼いている姿だったのか、焼いた後のソバだったのか。「いや全部」と言われると、そうかなと思うのですが。そういうことがもしご体験の中であればお聞かせいただくと、私たちももっと親しみを持って議論に参加できると思ったのですが、いかがでしょうか。

(大和田) 焼畑は映像が幾つかあるので、それをお見せした方が分かりやすいと思うのですけれども。椎葉の焼畑は木を切って火を入れて、初年度はソバをまいて、2年目はアワやヒエで、3年目がアズキで、4年目がダイズだったか。その後、森に戻したりします。そして25年、30年ワンサイクル。この仕組みがすごいなと思ったのです。

また、雑穀というものをほとんど食べたことがなかったというか、育てている現場を見たことがなかったので、「こうやってヒエやアワを育てるんだ」と思いました。「ヒエずーしー」という料理があつて、「ヒエ雑炊」なのですが、猪肉でだしを取るのです。お祝いごとのときにヒエ雑炊がふるまわれます。そのような、そこにしかない食文化、その背景、それがどのように作られてきているのか、栽培から脱穀のプロセス、生産の現場から口に入るまでのプロセスが全て分かるという、そこが魅力ですかね。

そのような意味で、農業遺産の現場に行くと、全て、そこでどのように生産されて、どう加工されて、最終的にどうなっていくかということが分かるのです。この間、みなべ町に行ったときも、梅の収穫体験をどうぞと言われたので行ったのですが、そのときに、忙しいけれどみんな集まってくださって。南高梅の産地であるとともに、紀州備長炭の産地でもあるのです。山の上ではウバメガシの森があつて備長炭の原料となる。斜面に梅が栽培されている。夜の懇親会は、備長炭で鹿肉、猪肉、それから海も近いからサザエなども焼いて、梅酒で交流するわけです。やっぱりそれですよ。

多分一番は、そこに会いたい人がいるかどうかなのですよ、結局。だから皆さんも地域に行くときに、魅力的な人がいて、何かよく分からない人間関係ができていて、会いたいから行くというようなところなのではないですかね。

————— (新川) 人が魅力。それから、そこでの特定の物や事ではなく、それを人が

生み出しているのですが、それができてくる、あるいはずっと続いている、その続き方が魅力、そんな感じですかね。

(大和田) あと大崎に関しては渡り鳥ですね。マガンちゃんですね。田んぼの生き物調査も、結構あそこでちゃんとやったというか。どこの田んぼもいろいろいますが、タガメ、タガメはあまりいないですね、ゲンゴロウがいたり、イトミミズがいたり。ああいうものは大人になって見ても楽しいですよ。私はたまたま好きだったのです。「田んぼにこんないろいろな種類の生きものがあるなんて」というような。関西に来るとジャンボタニシがいて、ピンクの卵を産むではないですか。私はあれが嫌いで。「ああこんな、関西の農家は大変だわ」と思いながら見ているのですけれども。

そのような意味では、比較的都市部においてもコウノトリが今、結構飛んでいますね。それで、コウノトリを呼ぼうとか。コウノトリはいいですよ、関西の人にとっては、地域づくりにはとてもいいと思います。雲南市でも増えていますね。

新潟の方は今、トキですね。トキが今度、佐渡から出て、石川県などに放鳥される計画です。東の方はトキです。

————— (新川) もう一つだけ、せっかくコミュニティ・デザイン論なので。これまでご覧になってきたところで、農山村のコミュニティとして、良いデザインである要素や条件、それをつくり上げている人の要素など、もし何かお気づきの点があればお伺いしたいです。

(大和田) 色々な地域を見ていて、あそこは良いなと思う地域に共通しているのは、それこそ地域おこし協力隊のOBや、何らかの仕事の関係で移住したIターンした人たちやUターンした人たち。特にIターンの都市の人たちを受け入れて、新しいものを生み出しているところです。

その条件で言うと、Uターン、Iターンした人たちが地元の人たちが受け入れるというか、お互い信頼関係を構築し、その地域資源を使って新しい価値を生み出しているところでしょうか。若い世代も増えている。海士町などもそうでしょうけれど。私が関わっている地域は必ずしもそうではありません。来てもなかなか大変だなと思っています。だから、うまくいくところでは、きつうまくいく、でもどうなのでしょう、その辺は。

————— (新川) 難しいですよ。でも今日のお話の中で、なかなかうまくいかないというところでも、大和田先生が外から入っていかれて、それはやはりいろいろなきっかけになっているなということが、事業の計画、プロジェクトにしてもあるように思います。そのような外との関係、それこそ交流人口ではないですけども、情報の交流、いろいろな資源の交流だとか、ものが動くだけでも違うと思うのですが、そのような行き来があると、多少は地域も元気になっているのかなというような感じはすることはするのですけれどもね。

(大和田) 大崎について言うと、大崎と隣の栗原の違いは、栗原にはいいものが本当にたくさんあると思うのです。しかしながら生かされていない印象があります。その点大崎は栗原より何か筋が通っている感じがするわけです。ラムサール条約湿地登録、農業遺産、そしてSDGs未来都市です。何が違うかというやはり市長だと思うのです。首長がずっと続いているか、毎回変わるかの違い。あと担当者をずっと変えずに来たことも大きいように思います。

大崎市の場合はラムサール、農業遺産、SDGs未来都市まで同じ職員が担当していました。その人は今年市全体の政策を担当する部署に異動したので、さらにこの路線が市の政策全体に広がっていくことを期待しています。市長に聞いたことがあります。市町村合併したときに、旧田尻町という小さい自治体で取り組んでいた「ふゆみずたんぼ」(水田の冬期湛水)や自然共生について、統合した後の本庁の産業経済部に自然共生推進係という部署を新設しました。それはなぜですかと。そうしたら「いやあ、大崎は渡り鳥に選ばれている地域だからね」と。これはとても重要だと考え、産業経済部の中の一係として設置したのだと。

それが隣の栗原との違いかなと思っています。しかしながら市民はそれをどう感じているのかという、そこまで多分感じていないのではないかなと思います。

————— (弘本) 今のお話の続きのような形になるのですが、大崎の事例で、8%の人が75%の面積を管理しているのだという話がありました。それについて市民は自覚していないのではないだろうかという問い掛けをされたのですが、それが今後どうなるのか、将来像のようなものをどのように描いていращやるか教えていただければと思います。

(大和田) 1次産業の担い手は今後増えることはないと思います。だからこそ、そうでない人たちがいかに関与する仕組みをつくるかが鍵だろうと思っています。そのためにSDGs未来都市に申請されたとみえています。

さきほどもお話ししたように農業遺産よりSDGsの方が昨今市民からも注目されています。ですのでSDGs未来都市の制度を通じて農業遺産を再インストールしようという試みかと思っています。

————— (川中) 今日の発表タイトルは「有機農業&生物多様性を活かした持続可能な地域づくり」です。生物多様性を中核に据えたまちづくりや村づくり、コミュニティ・デザインを進めていく意識付けをするにあたって、SDGs未来都市や世界農業遺産という仕組みはツールの一つとして機能しているのでしょうか。しかし、あくまでスローガンのような位置付けではないかと思われま。生物多様性を保持/向上させていくことにつながる、生態学的知識に裏付けられたライフスタイルへの転換/再創造をどう進めていけばよいのでしょうか。この転換/再創造がなければ、認定を取っても、言葉の普及にとどまって、人々の暮らしへの変化を導くことにつながらないのではないのでしょうか。

先ほどの小学校6年生の子どもが初めてトンボを持ったという話もありましたが、農山漁村でも生活様式や生活文化は都市化が進んでいると地域社会学の中でも言われています。

そうであれば、農山漁村に住んでいれば自動的にエコロジカルな生活になるかといえば、必ずしもそうならない。

ですので、生物多様性の保持／向上に資する生き方／暮らし方を促していくには農山漁村も都市も意識的な取組みが求められると言えるでしょう。自然学校は促進する取組みの一つとして今日の発表では示されたのですが、新しいライフスタイルをつくり出すほどのものではないと思われました。自然に親しみを持つことにはつながっているでしょうが。大和田先生は大崎や椎葉において、生物多様性に資する新しいライフスタイルが生み出されていっている萌芽をどこかに見いだしているのでしょうか。見いだされているのであればどういったものなのか、お聞かせください。

(大和田) 埼玉県小川町は、町の政策にもうオーガニックを入れました。やはり金子さんの農場があるということと、それからコロナ禍で随分移住者が増えました。小川町は割と都市から近い田舎という立地もあるでしょう。おっしゃるとおり、そのオーガニックなライフスタイルで人を呼んで、しかもそれが広まっている。ただもちろん、昔からいる人たちはそうかという、それは変わらないのです。だから新しく来た人たちが一定数いて、そのようなものを発信して、オーガニックなライフスタイルというのをやっているというのが小川町です。

椎葉はもう何か別格な感じですけども。椎葉の人たちと有機農業やオーガニックなライフスタイルについて意見交換をしたことはありませんが、森や山の神々と共に生きるというライフスタイルというか、生き方ではあります。

————— (川中) それはある意味で不思議な現象ですよ。都会生まれ・都会育ちの人たちの方が新しいライフスタイルを実践している。実践する場が都会にはないから、「ここ」だったら実践できるのではないかと地域の可能性を見いだして、具体化している。こうした実践が元からの住民に気づきをもたらす可能性もあるでしょうが、「いやそのままでもいいのに…」「何か『おしゃれなこと』をやっているなあ」という反応を受けることもあるでしょう。ちょっと「浮いてしまう」、そのような話を耳にすることもしばしばあります。

(大和田) 大崎に関しては、「みどりの食料システム戦略」という農林水産省が昨年導入した25%を有機農業に転換するという政策があります。あれをどう実現するかというのを政策的に推進してもらいたいと思っています。それは滋賀県も同じなのですけれども、農業遺産を取ったところはトップランナーですので、自主的に環境保全型農業を推進していくものと思われまます。市民でも若い人や女性に期待したいと思います。

————— (川中) 「大崎でプラットフォームをつくらうとしたら大変で…」と発表中に仰いました。都市であれ農村であれ、どこでもマルチステークホルダーのプラットフォームは形式化しやすいですね。現場レベルでの気軽な対話から新しいものが生まれていく流れを意図的につくり上げることは大変なことですが、農山漁村だからこそ感じられた「大変さ」はどこにありましたか。

(大和田) 農業遺産ですと推進協議会の構成員は男性の年長者が多い状況です。そこで、SDGs 未来都市のマルチステークホルダー会議については、2050年に社会で中心的に活躍している層や女性にも大いに参画してもらいたいと考えています。

東北に限らないのかもしれないのですが、最初に70代の男性が登場されるのは仕方ないと思っています。ですので、実行するメンバーには若い層を派遣してもらうように進めていこうと考えているところです。

————— (川中) 協働／協治を進めていくときに、そうした封建的に見える部分や、過去の経緯で組織化されているところを崩してネットワーク的なものに変えていくことが必要になってくるのでしょうか、大崎のように先進的な地域でも難しさがあるということでしょうか。この難しさはどのように突破できそうですか。コンソーシアムの取組などで「面白い個人」が多く出てきているように聞こえるのですが、そうした人々が新たな仕組みや文化をつくり出して、旧来のものを変えていく中心にはならないのでしょうか。

(大和田) 大崎でも、先ほどお話しした渡り鳥関係の人たちは外から来た人です。「ふゆみずたんぼ」を推進してきたNPO法人「田んぼ」のメンバーやNPO法人「蕪栗ぬまっこくらぶ」も仙台や県外から来た人たちが始めました。新しい価値を持ってきた移住者を市役所がうまく後押ししながら今までは進めてきています。また、20年間の取り組みを通じて育ってきた地元女性が渡り鳥のガイドとして中心的役割を担うようになってきたという変化もあります。SDGs 未来都市の会議に参加している大学生や女性を中心として、うねりになっていくよう今後も支援していこうと改めて決意しているところです。

————— (川中) 「風の人」と「土の人」という意味で言えば、その中間のような感じの人が今盛り上がっているということでしょうか。

————— (新川) 多分、風と土だけでは収まり切れなくて、風に影響を受ける土の人と、実はそんなものは関係ない土の人が結構たくさんいて。確かに影響はあるのだけれども、そんなものは連綿として昔から吹いていて去っていくので、そのままという人たちも結構いるのかなど。だから土と風のコラボのようなことは意識していますが、そんなもの成り立っていないよというところの方がはるかに多いというのが現実かなとは、農村を回っていていつも感じています。

(大和田) 「鳴子の米プロジェクト」はとても有名だし、うまくいっていると思いますが、では鳴子の人口が増えているかということ、そんなことはないわけで、減少に歯止めはかかりません。

しかし、また最近地域おこし協力隊卒業生が鳴子地区にIターンして新しい風が吹き始めています。そういう新しい層に期待したいと思います。

————— (川中) 行政が間に立つことで交わりにくいものがうまく調和していくといいですね。

————— (新川) 政策的にはそこがポイントになるということでしょうね。逆に、ではその行政を誰が支えているかということを考えてみると、そこがまたもう一つ難しい。だからよほどリーダーシップがきちんと取られていれば、また違う可能性があるのですけれども。

(大和田) 私が『アグリ・コミュニティビジネス』に本を書いたときには、上流域の「鳴子の米プロジェクト」と下流域の「ふゆみずたんぼプロジェクト」という二つのプロジェクト取材しました。当時はその二つのプロジェクトに全く何のつながりもなかったのです。それが10年たって農業遺産に認定されたときには、それがつながって、江合川と成瀬川の流域全体で包含されたわけです。でもそれを両方とも見ているのは実は渡り鳥のマガンです。ずっと飛んでいるから上空から見ている。

まちの鳥はマガンで、「パタ崎さん」というマガンのキャラクターもいて市民に愛されています。

————— (山口) 以前、阪神・淡路大震災のボランティア仲間と「地域は風林火山だ」という話で盛り上がったことがあります。「風」と「土」だけでなく、火をつける人と水をかける人がいるという話です。先ほどの川中先生の指摘にも関わって、どうやって担い手の平均年齢を下げるかが一層重要になってくる、という観点からのお話です。地域に愛着のある80歳を超える方々は来るなどと言っても来ますし、時折議論や動きに「水をさす」こともあります。そんな前提に立つと、そこに2歳の子が来ればいいのではないか、というのが私からの投げかけです。そのとき、 $80+2$ を2で割ると41になります。そうやって孫を超えてひ孫ぐらいの人たちがいると、自ずと言葉では通じなくなってくるし、居心地の悪い場所となったときには子どもは泣いて主張してくれます。こうして平均年齢40ぐらいにするというのが、大阪市天王寺区の應典院という浄土宗寺院に身を置いていたときにも「サリュ」という季刊誌で記し、年齢構成にバランスを整えていってはどうか、と常々言ってきました。

一方で、「火の人」は、地域の内外を問わず、騒ぎを起こす人、という言い方ができるでしょう。「焼き畑」という比喻も成立しそうですが、少なくとも一度火が出ると、それを消すのは簡単なことではありません。そこで、宇沢弘文さんではないですけども、地域で脈々と継承されてきた文化を次世代につないでいく資源をコモンズとして、共有財産として大切にしていく必要があります。なので、外から見たときに格好良いと評価されるところと、時には不合理で無駄だらけで封建的と思われるような部分にも、むしろ地域の持続可能性や先人たちへの敬意や住民の皆さんへの尊厳としては継続を支えることにも一定の意義や役割がある、ということが前提になることが重要でしょう。ただ、これは地域に関わる一人ひとりの判断では、積極的にコミットできないこともあるでしょう。仮にボランティアに使命感や責任感を持って立ち上がったとしても、地域の長が「それはまだだ」といった具合に、不文律のように守られてきた地域の規範が根ざしている場合があるためです。地域の治める制度というのは、そうした誰のものでもない、しかしみんなのものでもあるという、矛盾に満ちたような空気のもと、長い時間かけて安定してきたものであるでしょう。

静岡で生まれ育ち、その後京都や大阪で暮らしつつ、神戸や新潟や東北での災害復興に携わってきた経験から、私は地域で脈々と継承されてきた文化は、年中行事をリスペクトができる人がいることで初めて継承できるのではないかと捉えています。それにより、聞き心地のよい言葉を「スローガン」に留めず、地域活性化のツールとして使い方を工夫するきっかけをもたらしてくれるでしょう。それにより、行事を単に形骸化したしがらみとして敬遠されることなく、年長者たちに「させられている」「巻き込まれている」という感覚に浸ることなく、きちんと地域の資源として残っていくのではないのでしょうか。遺産を食いつぶしてしまうのではなく、さらなる価値を追求しつつ未来に継承されていくこととなるでしょう。

—————（新川）　そこで、でも今日の大和田先生の話聞いていてちょっと感じたのは、焼き畑の子どもたちの活動などを見ていて、変な言い方ですが、では400年前からやっている焼き畑をそのままやっているかということ、決してそんなことはなくて、もう毎回毎回、毎年毎年、変わっているのですよね。私は椎葉は知らないのですが、他のところで見ている、「去年やった人の話を聞いているけれど、今年はまだこれしかないで、これでやっています」のようなことで、どんどん変わっているところの方が圧倒的に多いような気がしています。

ですから、確かに焼き畑は残るのだけれども、同時にそこで実際の技術やそれを運用している人たちの行動の仕方があって、どんどん変化してきている。コアのところが変わらないものがあるかもしれないけれども、どんどん変わっているのではないかと感じるところがあります。

そうすると、こういうところでの文化や歴史や風土というのは、やはり人と一緒に変わりながら残っていくものは残っていく、なくなっていくものはなくなっていく。それを逆に言うと、これまでやってきた人たちがどのぐらい大事に思っているか、そして後から来た人たちがそれを大事に思っているか、そここのところかなというふうに思いながら聞いていました。逆に言うと、すたれるというよりは、むしろ、その活動そのものに対するそれぞれの感じ方、思い入れ方などが大事にされていかないと残らないのではないかと感じはしながら聞いていました。

実際に大和田先生は、現場で見られて、それこそ「ふゆみずたんぼ」で一生懸命やっている人たちがいますが、あんなものやっただって、農機も入らないし、あんなの駄目だと言う人も山ほど周辺の農地でいるのです。あるいは焼き畑も毎年毎年やはりちょっとずつ変わっているかもしれないし、このあたり、伝え方、伝わり方、でもその中でも、それを感じて頑張ってやっていこうという人たち、それに続こうとする人たちの続けようという意欲や気持ち、それぞれの思いは、やはり感じておられるところが先生もおありかと思っただのですが、いかがですか。

（大和田）　大崎と椎葉に対する私のかかわり方には違いがあります。大崎は市役所と関わりを持って進めています。ラムサール条約も農業遺産も市が政策として掲げてやっています。だから市のサポートというか、市がやっているのですね。焼き畑の方はある一つの集落、一つのクラブというか団体がやっていますので、それがなかなか村全体に広がらない

のです。最近宮崎日日新聞の客論という欄に書いた（8月15日付け掲載）のですが、椎葉民俗芸能博物館という大変立派な博物館が25年前（1997年）に開館したのですが、当時収集した貴重なもの、椎葉勝さんのお母さんの映像などが記録映像として残っているのです。ですけれども、上映機器が故障していて映像が出ない、学芸員も今はいないという状況です。一昨年新しくできた図書館・交流施設「KATERIE」の方は地域おこし協力隊出身で市役所職員になった人がいて「クリエイティブ司書」という肩書で仕事をしています。どこでもそうなのですが、新しいものに目が向きがちで、本当はいいものがあるのに、注目されていない。そこに追加投資しなければいけないのに、と残念に思っています。

先日万博記念公園にある国立民族学博物館で開催された焼畑の企画展の責任者の人と話をしていたときに、彼らは五木村と一緒にやっているのです、五木村でも展示会をするし、民博にも五木村の人が来てお話をしてもらったりしているということです。五木村の焼畑研究者が民博にはいるのです。残念ながら椎葉の焼畑研究者は分散、散逸しています。

十数年前に、焼畑を始めた滋賀県長浜市の余呉は、関西の大学の研究者の方たちと、地域の人たちが連携して実施しています。地の利もいいから継続しやすいこともあるでしょう。『焼畑が地域を豊かにする』という書籍も今年3月に出版されました。

椎葉もその価値を再認識し優位性を保つためにもアップデートしていかないと・・・と思いききました。

小学校で焼畑学習が行われている尾向地区は村内でもUターン率が高い地域です。それはこの神楽と焼畑学習や焼畑が継承されているからではないかと思っています。だからここはなくならないのです。例えば、焼畑学習を村内の全ての小学校で行ったらいいとかねがね思っています。

—————（川中） 都会からUターン/Iターンする人たちが、地域の価値を再発見しつつ新しいスタイルを持ち込むことで、新しい形の継承が展開されていっているという話は「やはりそうか」というところです。

ここで考えたいことは、例えば椎葉のような地域で育ち、生き物の視点や自然とのつながりをしっかりと学習した人たちの動きです。彼ら/彼女らは農山漁村から都会にIターンしているとも言えます。では、都会へIターンした人たちが、新しい価値観や視点を都会に持ち込んでいるのかといえば、そうっていない。地域おこし協力隊だ、移住促進だと言って、農山漁村は「よそ」から来る人の価値を非常に高く見ているのに対して、都会は多様な人を大量に引き寄せてきているのにもかかわらず、そのことをうまく活かしていない。それはなぜなのだろうか。どうしたら「都会へIターンする人々を活かせるのか。こうした問いが立ってきました。都市に農山漁村村の視点、あるいは農山村で自然と培われていく価値観や生活文化が持ち込まれていく流れを生み出すにはどうしたらいいでしょうか。

（大和田）

基本的に自分たちは田舎者で、都市は進んでいるので、自分たちがやってきたことには価値が無いと思っている人も多かったのではないのでしょうか。かつて農山村には次男三男の居場所は無いので都市に出ていきましたよね。昭和30年代に集団就職で都市に来た人

たちは現在 70 代です。

近年は、農山村ではふるさと学習が熱心に行われ、椎葉の様に中学までしか村には無いので高校から村外に出ていくのですが、農山村や農林業の価値というものを知っている子どもは増えているでしょう。しかしながら、生物多様性や自然共生については必ずしも農山村でも学んでいない子どもの方が多いように思います。

また、従来、資本主義や大量生産・大量消費型のビジネスの世界に農山村の価値観は必要なかったわけですが、これからは循環型の経済や、生物多様性、カーボンニュートラルなどが重視されるようになってきます。そういうことを農山村の教育や自治、行政政策、農林漁業でしっかり実践し、そういう考え方のできる人材を都市部に輩出することが求められるのではないのでしょうか。

————— ありがとうございます。

※同ワーキングは、2022 年 8 月 16 日（火）大阪ガスネットワーク都市魅力研究室にて行い、新川達郎、大和田順子、山口洋典、川中大輔、弘本由香里が参加した。